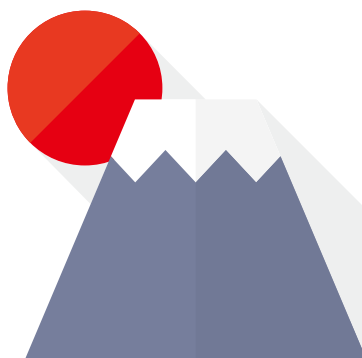


vol.007 JANUARY, 2019. [株式会社正文舎] 会社案内

with
SBS

※SBSは、正文舎 (SyouBunSyaの略です)

GROW UP



《新連載》
にほんごのまめ知識

[第1回]

〇〇さん
おりますか?

正文舎のアレやコレ。

「株式会社 正文舎」 **A** to **Z**
GROW UP

TOPICS ————— BIRTHDAY

What's NEW! ————— XMF Remote



株式会社 正文舎のすべての情報は、WEBサイトでご確認ください。
バックナンバーもこちらから。



Photo : Adobe Stock

「株式会社 正文舎」**A to Z**

GROW UP

Text : Kishi Masahiro

製造から『創造』へ

grow up [句動詞] 成長する、発展する

新 年、明けましておめでとうございます。
皆さまにおかれましては、ご壮健で新しい年をお迎えのこと
と心からお慶び申し上げます。

昨年中は、格別のご愛顧を賜り厚くお礼申し上げます。

わたしたち正文舎は、今年5月に創業85周年を迎えます。これも
ひとえに長きに渡り皆様方のご理解とご支援のお陰と感謝申し
上げる次第です。

そのような節目の年になる2019年ですが、わたしたちの全社
目標は『製造から「創造」へ』です。

情報を伝える手段が紙だけではなく、スマートフォンなど様々な
形へ急速に変化し続けています。そのような情勢の中、私たち
「正文舎」が出来ることは単なる請負の製造では無くお客様が伝
えたい情報をより伝わるようにご提案する『創造』が必要になり
ます。



GraphicDesign : Narita Sadayuki

印刷物やホームページ、どのような手段だとしても確実に情報が伝わるのかを考えた提案する。

その取り組みにチャレンジいたします。

私達が今まで培ってきた歴史とスキルを最大限に活かして、モノを作って納めるだけでなく、お客様の情報発信に関するニーズをキャッチアップできるよう創造してまいります。

社員全員で様々なことにチャレンジし、正文舎という「器」を変革し、社会に必要とされる存在になる。そうなるためには従来の常識や慣例を一度鑑み、更にもっといい方法はないかと想いをめぐ

らせること、そしてお客様に対してはもちろん、社内の仲間に対しても会社に対しても自分は何ができるかを考えてチャレンジする、今、自分ができること「だけ」から脱却し、ひとつ前に進むためには何が必要かを考えぬいて行動する。その積み重ねが社員ひとり一人、そして正文舎という会社の成長に繋がると考えています。

本年は31年続いた平成が終わり、新しい元号が始まります。

新しい時代へ夢と希望を大いに抱き、本年も社員一同懸命に努力して参りますので、変わらぬご愛顧・ご指導の程どうぞよろしくお願いいたします。

TOPICS

伝統のなかにある革新。

BIRTHDAY

Text : Narita Sadayuki



▲私が15年前に正文舎（当時：正文舎印刷）に入社して、初めてデザインし某機関紙に掲載された「創業70周年」を告知する自社広告。改めて見ると、当時から「新しいことを取り入れよう」という姿勢が伺える。

誰かにその話をすると、必ずと言って良いほど驚かれる行事が正文舎にはある。それは“バースデー”と呼ばれ、月締め終礼時に、その月が“誕生月”の社員全員に、札幌の某有名洋菓子店の1ホールのケーキが贈られるというもの。

正文舎は本年5月1日を以って創業85周年を迎える。この“バースデー”が一体いつから行われていたのか（おそらく戦後であることは想像に難くないが）、今となっては、正確に知っている者はいない。しかし、その所以は知るところにある。

私の聞き及んだ話では、「“ケーキ”を家に持って帰る」ことで、「お父さんは会社大切にされている」ということを示すこと、そして、そうすることで『お父さんへの尊敬の念を高めよう』ということらしい。如何にも“昭和チック”な発想で、今なら「家父長制」におけるジェンダー問題へと発展しそうな危うさをはらんでいる。

誤解しないでいただきたいのは、私はそれが「悪い」と言っているのではない。創業当時や、戦後しばらくの日本がそのような社会であったのは紛れもない事実で、そのなかから生まれたこの“バースデー”のシステムは、今の時代では「発想し難い」システムであるということを言いたいだけである。



Photo : Adobe Stock

それこそ今の社員の中には、ケーキを持って帰っても家族から「はあ？それが何？」とか「ダイエット中だからケーキなんていらない」とか言われていたり、「ケーキより現金をくれ」と思っている人がいるかもしれない。しかし、私はそれには与さない。

私個人としては、「社員：会社」の関係は「労働力：その対価としての現金」だけでは、家族の誕生日にプレゼントとして「現金」を渡すのと同じくらい無味乾燥で、会社という小さな“社会”の中では、うまく回らないものだと考えている。会社で仕事をするには、何らかの「息抜き」が必要で、この“バースデー”というシステムの「発想時の社会情勢」は別として、「ケーキ（現金ではなくモノ）を持って帰ること」への“こだわり”は、正しく正文舎の伝統で、次代にも伝えていくべきシステムであり、必要なコミュニケーションツールなのではないかと思う。しかも、3年前からこの“バースデー”でもらえるモノも、今までのホールケーキに加えて、焼菓子やその洋菓子店の商品券も選べるようになった。

このように、伝統の“核心”は変えることなく、内容はその時代に合わせて「革新」していく“柔軟な発想力”も「正文舎の伝統」となることを切に願っている。

③「〇〇さんおりますか？」

まめ

にほんごの知識

Text: Kurita Miyuki

01

電話で人を呼び出すとき、何と言いますか？
 仕事でなら「〇〇さんいらっしゃいますか？」と言うのが一般的ではないでしょうか。
 では、こんな言い方はどうでしょう？

「……〇〇さんおりますか？」

私が新卒で入った会社で、電話をかけるたび、定型文のようにこう言う先輩がいたのです。たとえば相手が社長であっても。無論「おる」は「いる」の謙譲語で、自分がへりくだる時に使うべき言葉。お客様や取引先に対して使うのは間違いであり、とても失礼ですね。

では、そんなことはあたりまえという方、この表現は正しいでしょうか？

「……〇〇さんおられますか？」

謙譲語「おる」に尊敬の助動詞「れる」をつけるという強引な技。これはそもそも文法がおかしいです。でも結構耳にしませんか。

なぜでしょう…

答えは関西弁にありました。関西では「おる」を謙譲語ではなく、「いる」と同じ一般動詞として使うため、これに尊敬の助動詞「れる」をつけても違和感がないというわけです。



Photo: Adobe Stock

具体例を挙げましょう。

“鶴瓶さんがさんまさんを新宿で見かけた”とします。鶴瓶さんなら「さんまが新宿におった」と言うでしょう。そして、もし相手が吉永小百合さんだとしたら「小百合さんが新宿におられた」となるのです。

前述の会社は関西出身者が多かったのも、先輩の会話に影響していたかもしれません。しかしビジネスは標準語でいきたいものです。先輩のように、「いつも敬語を間違っていた人」として他人の記憶に残ってしまうのはちょっと残念。敬語の間違いなんて、誰も指摘してくれないのでご注意ください。

校正者の憂い。

最近内校した仕事で同様の表現を見かけました。「〇〇な方がおりましたらご連絡ください」といった文です。お客様は大手企業なのに、いいのかなあと思いつつ検印をトン……

仕事は次工程へ流れていきました。

お客様の文章にはできるだけ立ち入らず、意味が通れば多少の間違ひは見逃すよう努力していますが、こういう文章に遭遇すると何ともはがゆい気持ちになります。

校正 (こうせい) proofreading
 印刷工程の途中で、校正刷りと原稿を照合し、文字の誤り、不備、不正確、不統一、不手ぎわ、レイアウトの違いなどを正す仕事。回数によって、初校、再校、三校などと呼び、校正が終わることを校了、訂正箇所が少なくて印刷所に責任をもたせて校了とすることを責任校了(責了)という。校正のミスは根絶しにくく、校正ミスに関する諺は数多く残されている。有名な校正ミスとして、モーセの十戒のうち「姦淫するなかれ」の not を落した『姦淫聖書』がある。そのほかに、単色または多色の図版を訂正する図版校正がある。
 出典：ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典

What's New!

XMF Remote (エクスエムエフ・リモート)

仕上がったデータをすぐに確認。
 お客様はカンパ・校正紙を待つ必要がありません。

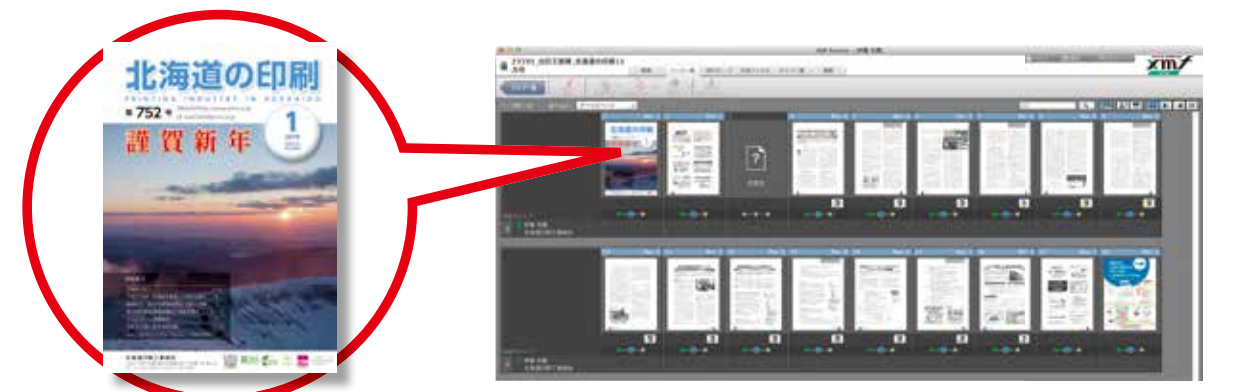
FUJIFILM WORKFLOW

インターネット校正システム

Real-Time Proofreading

校正時間や業務改善に貢献！

XMF Remoteは、インターネット上のブラウザで校正のやりとりをするシステムです。組版・訂正が上がれば、すぐにデータの内容を確認することができます。「紙」の校正紙を運ぶ必要がないため、雪道や交通トラブルでの配送の遅れなどで校正紙を無駄に待つことがなく、ご都合が良いときにご確認いただけますので、お客さまの貴重な時間を有効に使うことができます。



画面でご確認いただける内容は、カンタンなボタン操作で、すぐにPDFとしてダウンロードできますので、プリントアウトすることも可能です。

※XMF Remoteの詳細につきましては、担当営業までお気軽にご連絡ください。

《 会社概要 》

社 名：株式会社 正文舎

代 表 者：代表取締役 岸 昌洋

創 業：昭和 9年 5月 1日

設 立：昭和27年 5月15日

資 本 金：1,400万円

所 在 地：[本 社]
〒003-0802
北海道札幌市白石区菊水2条1丁目4番27号
TEL.011-811-7151
FAX.011-813-2581

[東京オフィス]
〒107-0051 東京都港区元赤坂1-1-7
オリエント赤坂モートサイド805
TEL.03-5413-4016
FAX.03-5413-4017

取扱い品目

印刷事業

【商業印刷物】

[情 報 系] パンフレット・リーフレット・カタログ・チラシ、会社案内、ポスター、カレンダー、PR誌、取扱説明書（マニュアル）

[物流資材系] 各種封筒、包装紙、シール・ラベル

【出版印刷】

[書 籍] 名鑑、各種名簿、記念誌、単行本

[雑 誌] 週刊誌、月刊誌、専門誌

[新 聞] 各種業界新聞、学校新聞

[学 参 系] 教科書、辞典、問題集、生徒会誌

[自 費 出 版] 同人誌、自分誌、詩集、エッセイ、写真集

【業務用印刷】

伝票・帳票各種、オンデマンド／バリアブル、小ロット印刷、賞状（学位記・証書等）印刷、可変宛名印字、ダイレクトメール

情報メディア事業（WEBサクセス） <https://www.websuccess.jp/>
各種WEBサイトの企画・制作・運営管理、各種データベースの企画・構築・運営管理、クロスメディア展開の企画・構築・運営管理

賞状net事業

賞状・表彰状等のインターネット通販サイトの運営



メディア・ユニバーサル・デザイン協会認定のメディア・ユニバーサルデザイン・アドバイザーの資格を持った制作者が多く在籍しています。



紙には古紙80%再生紙のOKマットコートエコグリーンを使用しています。



グリーンプリンティングの認定を受けています。



P-00023

全日本印刷工業組合連合会によるCSR認定制度の基準を達成しています。



IS 618840/ISO 27001

ISO/IEC 27001:2013 JIS Q 27001:2014
情報セキュリティマネジメントシステム
の認証取得をしています。



ぶらねっと
©syoubunsysa.inc

★ぶらねっとくんは、正文舎の業務や取組を紹介するときにどこからともなく現れるオリジナルキャラクターです。

想 像 を 創 造 へ

株式会社 正文舎

札幌
本社

〒003-0802 札幌市白石区菊水2条1丁目4-27
TEL.011-811-7151 / FAX.011-813-2581

東京
OFFICE

〒107-0051 東京都港区元赤坂1-1-7 オリエント赤坂モートサイド805
TEL.03-5413-4016 / FAX.03-5413-4017

<https://www.syoubunsysa.co.jp>

Publisher ■ Kishi Masahiro
Creative & Art Director ■ Narita Sadayuki
Chief Editor ■ Ebina Mikiko
A to Z Writer ■ Kishi Masahiro
TOPICS Writer ■ Narita Sadayuki
Focus on JAPANESE Writer ■ Kurita Miyuki
Editor ■ Honma Kazumi
Editor ■ Tokunaga Moe
Editor & Digital Printing ■ Watanabe Mototsugu

※本誌はデジタル印刷機 Ricoh Pro C7200sで、表紙にクリアトナーを使用し、オンデマンド印刷しています。